

秋も深まり、肌寒い日が多くなってくると「アシナガバチ」や「スズメバチ」の姿も少なくなってきました。

これらの種の幼虫は“肉食”ですので、子育てには他の昆虫などを狩ることが不可欠なのですが、虫の姿も少なくなってきたこの時期になると、子育ても終了です。

朽木の中などで“越冬”して来春、単独で巣作りを始めることになる「新女王」が羽化すると、今年の巣もそろそろ終焉を迎え、「新女王」以外のハチはすべて死んでしまうのです。

寿命は、女王バチで約1年、それ以外（働きバチや雄バチ）は約1ヶ月くらいです。

一方、今回の主役の「ミツバチ」は...

彼らはエネルギー源として「花蜜」を、幼虫のタンパク源として「花粉」を集めます。

花の咲く時期に巣内にミツを貯め込み、寒い冬を生き残るエネルギー源にしているのです。

花蜜や花粉を集める範囲は、「セイヨウミツバチ」では2kmくらい、「ニホンミツバチ」では1kmくらいだと言われています。

さて、集めた花蜜や花粉をどのようにして巣に持ち帰るのでしょうか？

長い口吻で吸いとった「花蜜」は、腸の手前にある「蜜胃」という、花の蜜を持ち帰るための“袋”に保管しておくのです。

そして「花粉」は、後ろ脚の“花粉かご”に、団子のように丸くして保管しておくのです。

一方、彼ら自身が飛ぶためのエネルギーは、巣を出る前に仲間の働きバチから口移しでもらうハチミツで、これで500km以上もの距離を飛び回り、やっとスプーン一杯分のハチミツを集めることができます。

ところで、「ハチミツ」は花蜜そのものではなく、ミツバチの唾液によってブドウ糖と果糖に分解されており、さらに、花蜜の糖分は20%ほどですが、ハチミツでは80%もの高濃度になっているのです。

これだけ水分が少ないと長期保存も可能で、「ツタンカーメン王」の遺跡から見つかったハチミツも、腐ってはいなかったといえます。

ミツバチの寿命は、女王バチで3年ほど、働きバチは夏の個体では約1ヶ月、冬季の個体では数ヶ月くらいでしょう。

ここで問題が起きます。

女王バチが3年も生きるのであれば、毎年春に生まれてくる新女王バチとの関係はどうなるのでしょうか？

“一つの巣に女王バチは一匹”が大原則ですので、女王バチは新女王の羽化の前に新たな巣をつくるために出て行くのです。これが所謂「分蜂（ぶんぼう）」と呼ばれる行動です。

そして、一番最初に羽化した“長女”の新女王が、まだ羽化前の新女王（妹）たちを殺すという行動を起こします。ときに、新女王同士の死闘に決着が付かない場合は、姉の新女王が「分蜂」（第2分蜂）することになるようです。

別添の写真は、今の時期、満開を迎えている「セイトカアワダチソウ」で花蜜・花粉を集めているミツバチの姿です。（1~3枚目：ニホンミツバチ、4~5枚目：セイヨウミツバチ）

ミツバチにとって、この花は「越冬」には欠かせない貴重な“蜜源植物”なのですね。









